

Martin A. Whyte 博士の逝去を悼む

秋山雅彦*



Martin A. Whyte 博士は2013年6月25日に英国 Sheffield のご自宅で、短期間の闘病生活の後、68歳の生涯を閉じられた。

博士は1973年に“Paleoecology of Upper Visean Marine Mudstones, near Dunbar, East Lothian”の論文で学位を取得、1974年以降 Sheffield 大学の講師として教鞭をとることになる。彼の研究分野は広く、1970年から1980年代にかけては石炭紀の層位学や古生物学、1980年以降は Yorkshire のジュラ紀の恐竜の足跡の研究、さらにはフジツボやサンゴ・二枚貝の石灰化の研究にも取り組んでいる。小田原で開催され

た第6回生鉱物の国際シンポジウム（1990年10月8～12日）、新潟県黒川での第8回生鉱物国際シンポジウム（BIOM2001 2001年9月25～28日）に参加され、化石研会員とも友好を深めていた。また、化石研創立50周年記念総会には、お祝いのメッセージ（会誌42巻3号、222頁）を寄せて下さった。

私は1991年に Manchester で開催された有機地球化学会議に参加後、Yorkshire 地域の地質とともに、Siccar Point の不整合の露頭を案内していただいた。2001年のBIOM2001シンポジウムの後、札幌学院大学で行われた恐竜に関する講義は、文系の学生たちに大きな刺激を与えることができた。私の英文論文や英文のアブストラクトの多くは、博士に校閲をしていただき、感謝に堪えないところである。私だけではなく、博士にお世話になった化石研会員も少なくないことと思う。

博士は2006～2008年、Yorkshire Geological Society の会長を務めておられた。あまりにも若い逝去の悲報に接し、博士のご冥福をお祈りする次第である。

写真：チリ・プーコンでの第9回国際生体鉱物シンポジウムにて（2005年12月7日、神谷英利会員撮影）

* 元化石研究会会長